

観光カナダと文学カナダ

平野敬一

現代カナダの代表的詩人のひとりアー
ル・バーニーに、「カナダ・病歴」とい
う有名な短詩がある。カナダという国を
高校生にたとえ、その病歴を語る趣向に
なっているが、僅か十行余りで若い国カ
ナダがもつさまじまの欠陥や未熟さをみ
ることにとらえている。最終行で、カナダは
「いつになったら大人になるのだろうか」
とバーニーは冷たく突き放している。

こういう病気のイメージは、バーニー
の好むところらしく、やはり同じころと
いうのは戦後間もなくの作品「大陸横
断」で、カナダを病魔に犯された婦人に
たとえているのがある。

「……病気で死にやしないだろうか」
この婦人は、すぐ老けてしまえばいい

うだ
わたしたちと共に。

その病気に効く抗生剤を

外部に求めるわけにいかない」

と詩人はうたい、自分で病気をなおす

しかないと訴えているのだが、どうもこ

のカナダのイメージは、あまりさわやか

でない。

バーニーという詩人だけがカナダにつ

いて病的なイメージをもっているわけで

はない。カナダについての病的な、否定的

なイメージは、カナダ詩の発生と同じは

ど古い。たとえばカナダの自然がもつて

いる残酷さや非情さをうたった作品とな
ると、もう枚挙にいとまがないほど多い。
散文の作品にも、もちろん、こういう否
定的イメージは、ふんだんにある。

カナダ文学に現われるカナダのイメー

ジを詳述するのが、本稿の目的ではない。
私がいいたいののは、アール・バーニーに
限らず、カナダの詩人や作家がとらえる、
こういう否定的なカナダのイメージは、
観光案内的なカナダの紹介記事には、絶
対といっていいほど登場しないというこ
とである。つまり、文学のカナダと観光
のカナダとの間には、大きなずれがある。
とどうより、両者まったく相重ならない
ほどかけ離れているのである。いったい、
どちらがほんとうのカナダなのだろうか。

話は飛ぶようだが、私は大学で担当し
ているカナダ文学のクラスで、学年始め
に受講生に、「カナダについて各自がいた
っているイメージを書かせることがよく
ある。大学生といつても、あまりカナダ
について予備知識をもっていない場合が
多いので、私の方もあまり期待はしない
ことにしているが、それでも学生たちが、
ほとんど例外なく、観光カナダのイメー
ジしかもっていないことに、がっかりさ
せられることが常である。

いわく「森と湖の国」、いわく「雄大
な大自然」、いわく……、と旅行会社の
案内パンフレットのキャッチ・フレーズ
を羅列するのが大部分である。カナダ文
学の勉強は、したがって、そういう観光
案内的な虚像にまでわされないで、カナ
ダの実像をさぐることなのだ、と私はい
いきかせざるをえなくなるのである。

観光のカナダが虚像で、文学のカナダ
が実像であると言いきると、異論が出る
かもしれない。しかし、こういう観光対
比は、虚像対実像の対比は、おそらくカ
ナダに限られたことではあるまい。

日本でいえば、たとえば長野県の観光



地を、次々と観光バスに乗って、あるい
はアイ・カートを駆って回ってみても、目
に入るのは観光客向けのつくり顔だけで
ある。それは表向きの顔であって、素
顔とは違うのである。土地の素顔を知ろ
うとすれば、観光という姿勢から脱却し
なければならぬ。観光をするより、た
とえば古いところでは島崎藤村の作品と

ものである。

文学作品中に歪みがないとは、もちろん、
いえない。所詮、作者の眼鏡を通した像
だから、そこにある種の色合いがくの
は、やむをえない。しかし、真実を伝え
たいという気持は、文学者の方が、観光
案内業者より、はるかに強いことは、論
をまたない。

観光事業は、本質的に客寄せである以
上、真実というものが入り込む余地はあ
まりない。観光客は、自分の目でみた現
地が絵葉書あるいは観光パンフレット通
りであれば満足するのだから、受け入れ側
が、その期待に添うようにとどめるのは、
当然であろう。すべての人が真実や美像
を求めているわけではないのだから。こ
の間の事情は、日本でもカナダでも、それ
ほど違わないであろう。

しかし、ほんとうにカナダのことを知
りたいという人は、観光カナダに満足せ
ずに、文学カナダ（熟さない言い方だが）
に、その目を向けなければならぬ。

始めにアール・バーニーの詩を引き合
いに出したが、すぐれた作家になればな
るほど、自国の自然や人間に向ける目は、
厳しさを増すように思われる。深い愛情
に裏打ちされているのに、というより裏
打ちされているからこそ、そのまなざし
は厳しい。語り口もけつして甘くない
（この点、二流以下の詩人になると、平